

### 1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4360290003		
法人名	有限会社 あい		
事業所名	グループホーム あい		
所在地	熊本県八代市島田町863-3		
自己評価作成日	平成25年10月20日	評価結果市町村受理日	平成25年12月27日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://search.kaigo-kouhyou-kumamoto.jp/kaigosip/Top.do">http://search.kaigo-kouhyou-kumamoto.jp/kaigosip/Top.do</a>
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205
訪問調査日	平成25年11月11日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

利用者、家族、スタッフそれぞれが個性を認め合い、大きな家族として思い合える、支えあえる関係を目指し、心と心のつながりを大切にしています。  
 少人数だからこそ細かい気付きを皆で共有し、認知症を持つ方が安心して生活できるよう、その時その時を大事にしています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

近年の新幹線開業に伴い新設された駅周辺は急速に宅地化が進み、ホーム周りも年々賑やかになってきている。入居者の一言から生まれた理念は、入居者がこれまでの生活スタイルを変えることなく暮らすために開設した運営者の意向と重なり、職員が日々のケアの指針としている。ホームは地域を巻き込んだ交流事業で高齢者や住民と連携し、同業者との災害ネットワーク作りは有事の際の炊き出しや人材派遣などの相互協力を目的としており今後の取り組みが期待されている。訪れやすいホーム環境は入居者と職員が互いに信頼し、穏やかな日々となって表出している。施設長は一人ひとりの職員の適性をホーム運営に活かし、入職したばかりの職員にゆとりとしっかりと基礎を固めてもらうよう指導している。職員の情熱と確固たる信念が温かで信頼のあるホームを形成している。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

### 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	会社としての理念、事業所としての理念があり、年に一度の全体集会及び、事業所の勉強会、会社内の勉強会などで定期的な振り返りを行っている。	理念「我のままに暮らせる」は入居者が発した言葉から生まれたものである。簡素な言葉の中には人としての誇りや生き方、尊厳や自由など連想される多くの意味合いが込められ、そういう場所でありたいと願うホームの基本姿勢となっている。管理者は入職した職員に理念を通じホームの思いを伝え、日々をかけて理解してもらうよう長期的なスタンスで捉えている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	町内会に加入しており、校区、町内行事への参加や、「さくら会」「ふれあい花畑」という2つのふれあい事業を行っている。	ホームは自治会に入り回覧板のやり取りや町内行事に参加している。地域との交流事業である「さくら会」は公民館を会場として地域の人々との親睦を図り、「ふれあい花畑」は、推進会議の中で出された意見を具体化し、新幹線駅前の有効活用として地域の人々と共に花壇作りが行われている。介護実習生の受け入れや地域の人々からの相談にも気軽に応じている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の方たちと一緒に「さくら会」「ふれあい花畑」を交流事業として行っている。その中で認知症の方々との交流や、認知症に対する質問、相談等も受けている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議の中で出た意見に基づき、昨年からの市の土地を活用し地域交流をおこなっている。又、法人内の防災訓練にも委員の方に参加していただき意見をもらうことも行っている。	推進会議のメンバーの中には開所当時の協力者もおられ、地域の代表でありホームのよき理解者として参加されている。行政や包括、家族や入居者も同席し、写真を使った活動報告や入居者の現状を伝え、参加者の意見や要望をホーム運営に反映させている。9月は会議と防火訓練をタイアップし、消防署の指導による総合訓練を参加者に見てもらい評価を仰ぐなど、会議の場が活かされている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	サービスや運営上での不明な点なども市へ連絡し実情も伝えながら確認や相談を行うようにしている。	職員は推進会議の案内状を行政担当者に直接手渡し、友好的関係を築きながら不明な点があればその都度、質問を投げかけている。新幹線駅前の有効活用については行政の協力により土地が提供され、「ふれあい花畑」として地域美化にも一役を担っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	社内外での研修を通し身体拘束への正しい理解を深めケアに取り組んでいるが、全ての職員が理解をしているかの確認までは至っていない。	職員は系列施設との合同研修で身体拘束について認識を共有している。車椅子への移乗を目隠しで行い、いきなり行動を起こされることへの恐怖を体験するなど、相手の立場に立って考える事を確認している。管理者は気になる言葉かけや対応などを目にする都度、指導を行い入居者自身が自分達を評価する評価委員であると語り、責任ある行動をとるよう指導している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	研修や勉強会で共有している。実習の受け入れなどを活用し、第三者の意見を通し、ケアの振り返りの機会としている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	外部研修や、社内での勉強会を行って学ぶ機会を設けている。ホーム側からの支援ではないが、制度を活用している方はいる。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居時、改定時において当ホームのケアの考え方や看取りに対する考え方の説明を行い同意を得ている。又説明が必要と考えられる場合は、家族会などで行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	面会時、家族会などで意見や要望を聞くようにしており、運営へ反映出来るようにしている。	職員は入居者との日ごろの関わりの中で思いを確認し、表現困難な方へは行動や表情、生活歴から推し測っている。家族の面会時にはしっかりとコミュニケーションをとり、遠慮なく話してもらうよう心がけている。家族会では職員が席を外し、ホームへの忌憚のない意見を収集している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	現場ではその都度意見が言える環境づくりをしており、又勉強会で意見交換など行っている。 運営会議などで話し合いを行い、反映出来るようにしている。	ホーム内は職員が普段の気づきや意見を自由に言える環境にあり、入居者の体重増加への対策も全員で検討している。管理者は職員の声を聞き相談事に応じながら働きやすい職場環境を整えている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	課業を作成し、それぞれの等級ごとの役割の確認、振り返りができるようにしている。 個人面接を通し、各自の向上心につながるようにしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	個々の目標や実績などに応じて、法人内外の研修を受けるようにしている。実践者研修、リーダー研修なども受けるようにしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	GH八代連絡会などでネットワーク作りをしている。開設者支援実習なども受け入れをし、相互訪問や情報交換の機会となっている。		
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居相談の時点で不安なことや要望などには時間をかけて聞くようにしている。入居時の訪問などを通し、本人の思いを出来るだけ知る努力をしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	相談の時点でじっくり話しを聞く時間をつくり、思いを受けとめるようにしている。複数回時間を取りながら、関係づくりに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	当ホームを利用されない方に対しても相談の時間をじっくり作り、本人やその家族に必要なサービスが利用できるよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員が介護をしてあげているという場面も見られるが、大家族の一員のように利用者に教えてもらったり、相談したり、一緒に笑ったり、泣いたり、その時々を共有している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	小さなことでも家族への相談・報告を欠かさないようにしている。情報を共有することで家族と一緒に考え、共に支え合える関係になれるよう努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人の状況に応じて本人の馴染みのある場所へ行ったり、自宅で家族との時間を過ごしてもらったりしている。面会も家族に限らず、知人などもある。	家族や知人の面会時には入居者の日頃の様子を伝えながら、ゆっくりすごしてもらおうよう配慮しており、入居者に食事介助をして安心して帰宅される家族もおられる。地域商店での買い物や「さくら会」で馴染みの人々と顔を合わせ、家族の協力による病院受診や外出の機会を支援している。	ここ数年看取りの事例はないが、過去の事例を通した研修会を開催することで経験のない職員にとっても、更に終末期のありかたなどを共有する機会に繋がっていくと思われる。
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士がその時々で相談したり協力し合いながらの場面では、職員はなるべく見守るようにしており、状況に応じて関わっている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス利用が終わっても、自宅や病院への面会、家族への相談援助、お葬式や初盆など、これまでの関係性を大切にしている。家族のホームへ訪問も続いている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の言葉や表情、家族からの情報などから、本人の気持ちに添えるよう努めている。意向の把握が困難な方にはその人の立場で考えるよう努めているが、本人本位の難しさを感じている。	職員と入居者の距離は近く、職員は入居者の声の端々や行動の中から出た思いをプランに繋げている。高齢化と共に、年々直接的な声を引き出せなくなるなど苦労している部分もあるが、本人の意向に思いをはせるよう努力している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人や家族との関係を担当職員を中心に築いていながら、本人の生活歴や馴染みの暮らし方などの把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の関わりの中で見られる小さな気付きを職員間で共有出来るよう情報交換を常に行っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	計画作成担当者を中心に、本人や家族、ケア担当者の意見を聞きながら、ケアプランへ反映させている。	入居者を職員の担当制としており、計画作成者は本人や家族の意向を基に担当者の声をプランに反映させている。化粧を楽しまれる方や異動する職員へ手紙を書かれる方など馴染みの生活習慣を継続し、残存能力を引き出し自信に繋がるような内容を掲げている。三ヶ月から半年ごとに評価修正し現状に即したプランは、家族へも丁寧に説明されている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケアの実践や結果、気づきなどは細かく個別記録に記入し、職員は業務開始前に必ず記録の確認をし情報共有に努めている。疑問点は確認を行ったうえでケアにあたっている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	利用者が隣接の宅老所にお茶をしにいったり、地域のふれあい事業に参加したり、地域の祭りへの参加もしている。業務に捉われず、その時生まれたニーズへ支援出来るよう努めている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	ふれあい事業等を通して地域との関わりも深まってきており、いろんな職員が地域と関わることで、地域資源の把握にもつながっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医への相談や情報交換を行うことができている。家族だけでの受診が難しい場合はホーム職員が同行するなど、適切な医療を受けられるよう努めている。	これまでのかかりつけ医を継続して支援し、受診は家族対応を基本としているが、現在は家族の要望や状況からホームが中心に支援を行っている。受診が困難な方は往診支援に変更している。職員は水分や食事量のチェック、入居者との日々の関わりで早期発見に努め、入院とならぬよう早めの受診対応を心がけている。インフルエンザの予防接種については協力医による往診が支援されている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護職は日々気付いた事を看護師へ相談・報告しているため、早期発見につながり適切な受診や治療が行えている。併設の訪問看護ステーションが週に一度の健康チェックを行いアドバイスももらえている		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	認知症の理解があつての入院受け入れは困難な場合が多いため、家族の意向を確認し、担当医への相談を行っている。家族や担当医と相談を重ね、出来るだけ早期に退院が可能になるよう働きかけている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	希望があれば看取りを行うことを契約時に説明し同意を得ている。本人の状況に応じ早めの段階から意向の確認をし、看取りに入る前には家族と職員間で話し合いを行い、家族の要望を十分に聞き、看取りケアへはいるようにしている。	入居時に重度化や終末期支援に関するホームの指針を説明し、看取りの状態に入った時点で医師を含め家族と話し合いを行っている。家族の気持ちは入居者の状態が変わって行くのでその気持ちを大切に、気持ちの変動は遠慮なく伝えて欲しい旨を話している。これまで職員の思いや家族の協力により、人生の先輩である入居者を送る看取り支援の事例も確認された。	ここ数年看取りの事例はないが、過去の事例を通じた研修会を開催することで、経験のない職員にとっても、更に終末期のあり方などを共有する機会に繋がっていくと思われる。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	社内で勉強会を行っているが、全ての職員が急変や事故時に対応できる実践力を身につけているかは確認出来ない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	運営推進会議の委員の方に法人の防災訓練に参加してもらい意見交換などを行っている。近隣の高校に災害時の避難についての問い合わせ、夜間想定訓練や地域含めた連絡網の作成の意見も出ている。	年二回の総合訓練の実施や毎日の火元チェックによる安全管理が行われている。訓練には推進会議メンバーや回覧板を通して地域の方へ訓練の参加を呼びかけるなど協力体制を図っている。備蓄は台風情報などを受けて必要な時点で準備を行っている。	地域の方へ訓練の参加協力を呼びかけるなど、協力体制に努めており引き続き協力体制の強化や、夜間想定訓練の実施に期待したい。また、訓練に参加した近隣者から自分たちは何をすれば良いのか？という質問も出されたとのことであり、近隣者の協力内容を検討し次回の訓練で活かしていただきたい。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	その人に合わせた人格を尊重した言葉遣いを、実践の場や勉強会で意見交換しながら考えているが、まだ十分に出来ているとは言えない。	一人ひとりを尊重したケアへの取り組みは基本的な重要事項であり、新人職員に与える影響からも施設長や管理者は研修の中だけでなく、日々業務の中で指導を行っている。呼称についても、苗字や下の名前など家族の了承を得た呼びかけを行っているが、特に新人職員に対しては、入居者との信頼関係を十分作り、その後に呼称を合わせるなど、入居者との関わりの大切さが伝えられている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	希望が言える方に対しては、希望時に外出などが出来るようにしている。表現が出来ない方、介護度が重い方に関しては情報をもとにプランに入れたりしているが、十分とはいえない。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	本人のその時の気持ちに添えるよう努めているが、その時の職員体制などで希望に添えない時がある。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	その人らしいおしゃれが出来ているのかは難しい部分もあるが、身だしなみは心がけて支援している。外出時には本人や家族と服を選んだりしている。希望にあわせて美容室への外出支援や、訪問カットなどの支援をしている。		



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	料理のリクエストや味付け、盛り付け、後片付けなど職員と一緒にやっているが、それを出来る利用者は少ない。その人に合わせた適量など本人に聞きながらやっている。ミキサー一食の方に対しては食事を楽しむことが出来ているのかは疑問。	職員は冷蔵庫の中や季節について会話をしながら、希望のメニューを引き出し献立作成に繋げている。旬の食材を心がけ特に卵や牛乳・ミンチ肉については安心・安全にこだわった食材が購入されている。エプロン姿で台所にたたれる方や後片付けなど入居者もできることで食への関わりを支援している。個々に応じた食事形態で会話や美味しいお茶を楽しみながら職員も同じものを一緒に摂っている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	その人に適した食事や水分量の観察はそれぞれの職員が出来ている。状態に応じてその都度臨機応変に対応出来るよう努めている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	歯科往診で衛生士に指導をもらったり、その人に適したブラシなどを使い起床時や毎食後の口腔ケアに努めている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	その人の排泄パターンに合わせてたり、その人のサインを見逃さないようにして、排泄がトイレで出来るよう努めている。夜間以外はオムツを使用しないよう支援している。	排泄パターンの把握や個々のサインを記録に残し共有することで、日中はトイレでの排泄支援に努めている。昼間は排泄用品を併用しながら布下着で過ごされるなど、職員の連携した排泄支援への取り組みが確認された。夜間はリハビリパンツやポータブルを使用される方もおられ、使用したポータブルは、消毒や天気の良い日は日光干しにより清潔に保ち、気持ちよく使用できるように配慮している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	勉強会で排泄の機能について学んだり、一人ひとりに合わせた下剤の調整、水分の調整などの工夫をしている。その人の好みや生活習慣に合わせた支援や、安心して排泄できる環境づくりを心がけている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	大まかな入浴予定はその日で決めているが、本人の状態に応じた柔軟な対応を心がけている。希望が言える方に関しては相談が出来るが、表現できない方には難しい部分がある。	入居者に希望の時間を確認しながら、週三回を目安にゆっくりとした入浴支援に努めている。拒否の方へは、時間は要しても本人が入りたくなるような関わりを心がけたり、別日に変更するなど、無理のない支援に努めている。職員は入居者が気持ちよく入浴を楽しめるよう、浴室内の環境を整えている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	状況に応じて日中でも安心して休めるよう支援している。起床時間、夜間の入床時間も柔軟に対応している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服用薬品名シートをファイルにまとめてあり、確認出来るようにしている。服薬支援、症状の変化の確認は出来ているが、一人ひとりが目的、副作用の理解が出来ているかについては十分ではない。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	利用者の生活歴や、今までの仕事や家庭での役割りを本人や家族から情報をとり、本人に合わせた支援に努めているが、十分でないところもある。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	散歩やふれあい事業への参加、買い物などは日常的な外出の機会となっているが、その日のその時の本人の希望に添えないことはある。家族の協力のもとで外出も行っているが、全ての利用者の支援にはなっていない。	地域交流への外出や庭先に出たり、近隣の散歩・買い物支援などが日常的な外出をはじめ、個別支援による理・美容室支援を実施している。また、受診をはじめ家族の協力を得ながら入居者の外出を支援している。	入居者の状態も様々であり、なかなか全員での外出は困難になっていくと思われるが、引き続き個別や現況でできる外出の機会が展開される事に期待したい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	外出時にお金の支払いを自分でされない方、出来ない方がほとんどであり、希望や力に応じての支援となっているのかは疑問。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	自ら電話をしたり、手紙を書いて出すことは日常的にはないが、送られてきた家族や知人からの手紙などを見たり、かかってきた電話で話しをしたりしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	談話室の外には緑のカーテンを家族が毎年植えており、季節の野菜を収穫して調理したり、季節の花を飾るなど、生活感や季節感を感じてもらっている。	「これまで知らなかった者同士が、一つ屋根の下で出会い…」と、【基本理念】に謳われているように、ホーム内は一軒の自宅の中に居るような空間である。職員の持ち寄った花や、目の前の田んぼからも季節を感じることができる。入居者が食事や日中の殆どを過ごすリビングは、居心地良く過ごせるよう、加湿器の設置や空調管理が行われている。ソファで寛ぐ入居者の傍で、ゆっくり語りかけ食事へ誘導する職員の姿に日常の場面を見ることができた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	談話室、廊下、リビング、縁側など、思い思いに過ごせる場所がある。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人や家族と相談しながら、本人の馴染みのものや好みものを用い、本人にとって居心地のよい空間作りに努めている。	早出職員を中心に日々の掃除や換気が行われる居室は、家族と連携し本人が安心して過ごせる空間作りが行われている。天候の良い日は布団の日光干しを行い、気持ちよく就寝できるように努めている。入室を好まれない方へは、布団干しや取り込みを一緒に行うことで安心してもらうなど、プライバシーにも配慮しながら個々に応じた細やかな支援が行われている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	本人のわかる、出来ることを職員一人ひとりが把握して、見守りに努め、できるだけ本人の意思で行動できるように工夫している。		